

## 田園都市(Garden Suburb)の計画とその住居形式に関する研究(2) —— アメリカの事例の分析 —— (梗概)

香山 壽夫

### 序

この研究は、先回のイギリスの事例研究に続くもので、19世紀後半から20世紀初頭にかけて建設されたアメリカの都市とその住居形式についての事例研究である。

この一連の研究の基本的な目的は、住居研究あるいは住居地区研究という観点からすると、近代の都市計画および住居建築に最も大きな影響を与えたと考えられるアングロ・アメリカンの都市住居の事例を幅広く考察することにあるが、建築意匠研究という観点からするならば、大衆化社会における建築の通俗的理念、すなわちポピュラー・イメージを具体的に考察するための事例を都市住居の中に見出さんとするものである。

こうした具体的な研究目的に沿って、今回アメリカの事例研究が選ばれた理由を更に整理して述べるなら、次のようにまとめることが出来よう。第一にアメリカの都市は、いずれも急速に建設され、あるいは更に膨張した（場合によっては更に衰亡した）ものであって、近代都市・住居の成立の諸要因が観察し易いことである。アメリカが、近代的な産業社会の段階に突入するのは、南北戦争が終った1860年代からのことであり、今日あるアメリカの大・小の諸都市は、その後の数年から数十年の間に今日見る姿に急速に建設されたものである。このことは必然的に、その成立の条件の特質が、都市・住居の形式の特質に直接に反映されることになる。これが、アメリカを研究の対象とする第二の理由なのであって、すなわちアメリカの都市・住居の多様性は、地理的条件の差異、計画あるいは投機的開発といった社会・経済的条件の差異、あるいは文化的条件の差異といったものが形式を規定する様相を観察する場合の好例なのである。

第三の理由は、アメリカの都市・住居の様式は、大衆社会のポピュラーなイメージが強く規定していることにある。すなわち、流動性の高い大衆を相手にした都市・住居の建設は、常に誰にでもわかる簡単明瞭な造形言語となって組み立てられていなければならなかった。と同時に、その表現は、時代性、すなわちその時点における新しさによって大衆を惹きつけることが強く求められた。すなわち、アメリカの都市・住居の意匠には、大衆性と時代性が明瞭に観察されるのである。

第四の理由は、アメリカの都市・住居の意匠に際立って観察し易い、様式の原型と変形の問題である。言うまでもなく、アメリカの文化の最も大きな源流はイギリスであるが、それだけでなく、オランダ、フランス、ドイツ、北欧、あるいはスペインの影響も大きい。しかも、より正確に言えば、それら原型となったヨーロッパ各国の様式をひとつの国からも時代によって異なった様式を選んで移入している。いかなる様式を好んで移入したかが考察の第一の対象となるが、更に興味深いことは、そのヨーロッパの原型がアメリカに入った途端に変形されることである。このことは、すべての異なる文化の比較研究における基本的関心であろうが、アメリカは、その原型の多様性と変形の複合性において最も興味深い考察の対象と言えよう。

以上の理由にもとづいて、われわれの行った具体的な研究作業は、大きく三つの段階をとっている。第一は基礎的な文献資料の研究であって、これは調査対象についての基礎資料調査と、アメリカ建築様式の造形言語について整理・分析である。特に後者については、これまでの歴史研究が明らかにした諸様式を、造形言語の「弁別的要素」と「全体形」という概念を用いて統一的にとらえ直している。第二は、実地におけるフィールド・ワークであって、7人による調査チームが、約5週間に渡って、太平洋沿岸地域、南西部地域、中西部地域、東部沿岸地域の4つの地域の主要都市を実地に調査した。そのうち特に重点的に調べたのは、サンフランシスコ及びその周辺地域、ロスアンジェルス及びその周辺地域、コロラドの鉱山都市群、シカゴ及びその周辺地域、セント・ルイス、ニューヨーク及びその周辺地域の6ヶ所である。この梗概においては、そのうち5ヶ所の事例についての報告のみを抜粋している。

又、今回のアメリカの調査においては、一般的には郊外と見なし難い、都心部の都市住居群、すなわちロウハウスを調査対象に含んでいる。これは、先に述べた如く、急速に建設され拡張したアメリカの都市においては、郊外は直ちに都心部にのみ込まれていくことが多かったことにもよるが、住居様式の比較研究を内容豊かにするためには、高密度住居群も積極的に考察の対象としたかったことにもよる。

## 第1章 ニューヨークのロウハウス

### 1) 研究対象の特質

何戸かの住戸が並列されて一つの住棟を形成する住居形式をロウハウスあるいはテラスハウスと呼ぶが、ニューヨークのそれは、18世紀末以降、1920年頃に到るまで独自の展開を遂げた。本章では、ニューヨークのロウハウス(Row House)を対象とし、特にこの対象の特質が示されている、三つの局面に関する考察を行っている。それらは、1) 外観のスタイル、2) 平面形式、3) 連続形における造形的まとまり、である。この対象は、ニューヨークという著しい都市的状況における特殊な住居形式ではあるが、ロウハウスという一定の形式をもったファサードに対するスタイルの付加という造形問題、限られた規模における平面構成という問題、更に住戸の集合に際する統一性と個別性という問題等に関しては、極めて興味深い対象である。そして、ここで考察される問題は、都市型住居に限らず、田園型住居の考察においても無視し得ない問題であろう。

### 2) 外観のスタイル

ニューヨークのロウハウスは、中産市民のための住居であり、建築家ではなく開発業者の手によって建設される場合が多かった。そうしたアーバン・ヴァナキュラーとしてのロウハウスは、その時々の流行のスタイルで飾られることになる。とはいっても、ロウハウスの間口、階数、窓の数・位置といった基本的な点は、さほど大きな変化を生じなかったのであるから、ロウハウスのファサードの造形課題は、ある一定の形式をもったファサードに対しいかに様々なスタイルを付加していくかということであった。

本項では、スタイルという観点からロウハウスのデザインを分類し、考察を行っているが、ここでは特に重要と思われる四つのスタイルの特徴を概観しておこう。

フェデラル・スタイル(1780-1840)(図1)は、赤レンガの外壁、強いコーニス、その上に突出したドーマー窓、高いストウープ(玄関口の階段)等を第一の特色とする。玄関廻りには、アダム風の繊細なデザインが施され、玄関ドアの上部、脇には明り窓が設けられる。外壁の窓は、上げ下げ式で、ガラス面はグリッドのパターンに細かく割られ、街路側には開閉式の雨戸が付けられる場合が多い。窓、ドアの廻りには、大理石又はブラウン・ストーン(茶褐色の砂岩)のトリムが付けられる。

グreek・リヴァイヴァル・スタイル(1825-1855)

(図2)は基本的にはフェデラル・スタイルと類似しているが、ここでは、アティックの窓が立面上エンタブラチュアの中に納まり、ドーマー窓がなくなることで建物の輪郭が単純化されたこと、及び玄関廻りにはコラムと

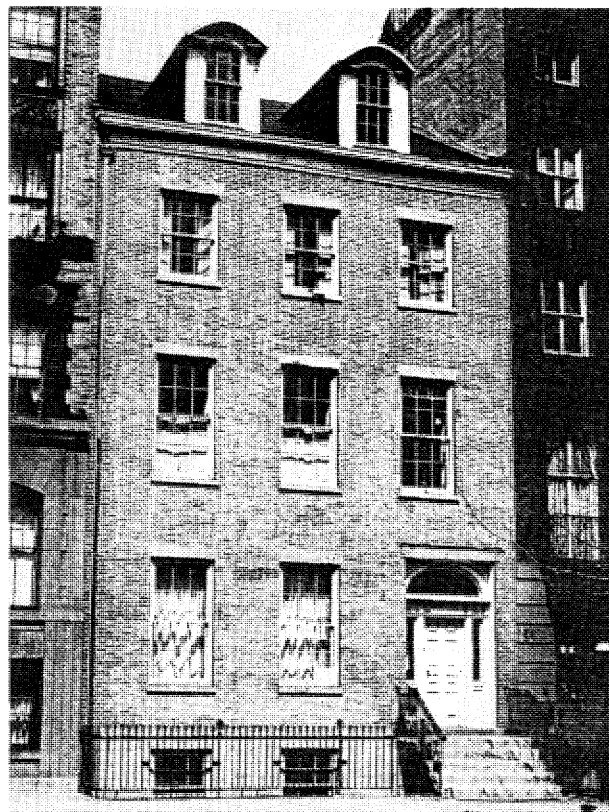


図1 スティヴサント・フィッシュ邸(1803-1804)  
フェデラル・スタイルのロウハウス



図2 ワシントン・スクウェアの北側に建つグreek・リヴァイヴァル・スタイルのロウハウス(1835-1836)

エンタブラチュアによる力強いポーチが形成されたこと等の変化が生じた。

イタリアネイト・スタイル (1845-1875) (図3) はブラウンストーン・スタイルとも呼ばれ、文字通り赤レンガに代わる滑らかなブラウンストーンの壁面を第一の特色とする。ここでは、ストウープは更に高くなり、コーニスが大きく突出し、窓のトリムも四方枠としてより明確な形を取るなど、より力強い表現が見られるようになる。窓はより縦長となり、ガラス面が大きくなると共に、雨戸は消滅した。玄関ポーチでは、コラム又はコンソールを伴ったペディメント等が形成される。

イタリアネイト・スタイルの後は、様々な装飾的スタイルが流行するが、それらは変化に富んだ表現を有し、そこでは出窓、頂部の変化等によって、既に述べた三つのスタイルのような単純な輪郭、規則正しい窓割りといった特徴が失われた。ボザール・スタイル (1885-1920) (図4) では、平面構成の変化と対応して、ストウープが2-3段程度に退行するという現象も見られた。

### 3) 平面形式

ロウハウスは、全体の大きさが限られていること、及び街路側と裏窓側からの採光しか望めないこと等の理由により、自ずと平面形式が限定される。間口は、ほとんどの場合が20フィートから25フィートの範囲内であり、多くの場合に、階段室と諸室という縦の分割が見られる。一方奥行きは、35フィートから60フィートという具合に、範囲に巾があるが、それでも奥行き方向に2室若しくは3室を確保できる程度である。本項では、先のスタイルの分類に従って、平面構成の変化を述べているが、ここではその概略のみを記す。

フェデラル・スタイルでは、側壁に沿ってホールと階段室が置かれ、地階に食堂 (街路側) と台所 (裏庭側)、1階にフロント・パーラーとバック・パーラー、2階に2寝室、その上にアティック階という構成が一般的である (図5)。1階のバック・パーラーは公式な晩餐室としても用いられた。規模の大きな住戸では、3階も寝室階



図3 西46番ストリート322番～350番のイタリアネイト・ロウハウス

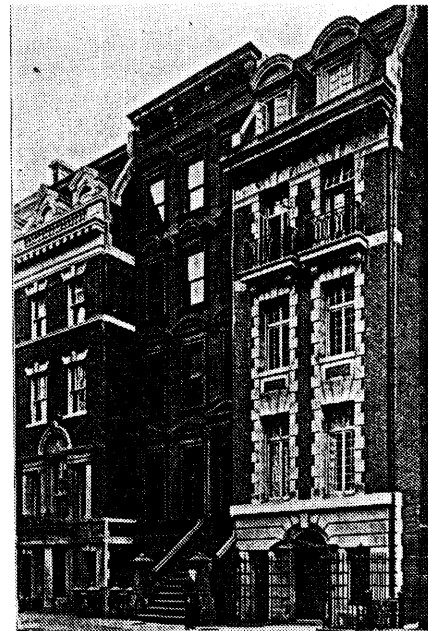


図4 ボザール・スタイルのロウハウス  
東81番ストリート64番～68番  
中央にイタリアネイト・スタイルの住戸が残されている

で、4階がアティック階となる。

グreek・リヴァイヴァル・スタイルの住戸は、具体的にはフェデラル・スタイルのそれと類似した平面構成をもつが、4階建てが一般的である。また1840年頃から

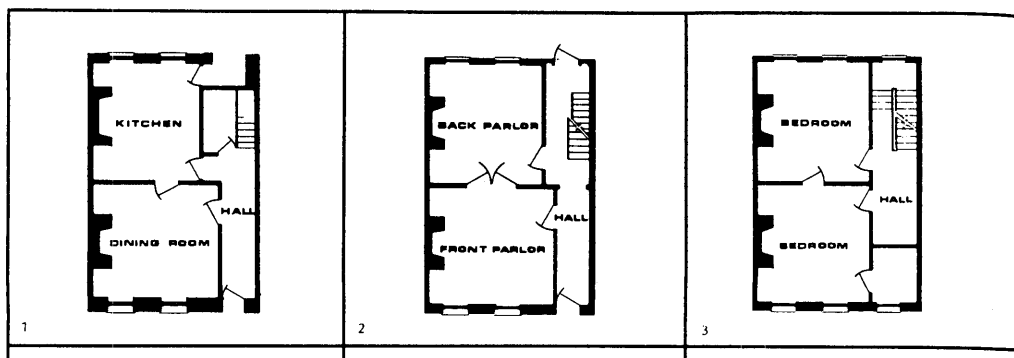


図5 フェデラル・スタイルの住戸、地階、1階、2階平面

は、裏庭に面して「ティー・ルーム」と呼ばれる解放的な部屋が付加される例が増す(図6)。この「ティー・ルーム」は、イタリアネイト・スタイルの住戸においては、日常的な食堂として用いられることになる。1850年頃にダムウェイターが実用化されたが、こうした変化に寄与した。この段階で、1階平面は奥行き方向に三分割される形式となったのであるが(図7)、その後次第に2つのパーラーの境界は不明確になっていき、1860年代には、パーラーと食堂という二室構成が再び一般的となる(図8)。パントリーのみが裏庭に突出するという形式も多く見られる(図9)。こうした1階にパーラーを置くという平面形式は、外観のスタイルの変化にもかかわらず、19世紀後半を通じて一般的であり続けた。しかし、こうした形式とは異なり、地階に食堂と台所、1階に応接室(あるいはオフィス)と晩餐室、2階にフロント・パーラーとバック・パーラー、3階から5階に寝室群という平面構成をもつタイプも存在した(図10)。このタイプは、ストウープが低く、完全な地階が生じるタイプである。イタリアネイト・スタイル及びボザール・スタイルに、このタイプを見出せる。この場合、階段室は住戸の中央に置かれることになる。

#### 4) 連続形における造形的まとまり

ニューヨークの街路はグリッド状に作られているため、ロウハウスは直線的に並列された住棟という形にならざるを得ない。その際、住戸が連続して形成される住棟の造形的まとまりは、大きなファサードとして、即ち三次元としてではなく二次元上のまとまりとしてのみ作り出されることになる。この場合、まとまりと変化、即ち統一性と個別性が造形上の重要な課題となるが、ここではそうしたまとまりと変化を生み出す建築的要素を抽出し、それらを連続的要素と反復的要素とに分けて考察した。連続的要素としては、輪郭、素材等を取り上げ、反復的要素としては、ストウープ、玄関ポーチ、窓等を取り上げて論じている。

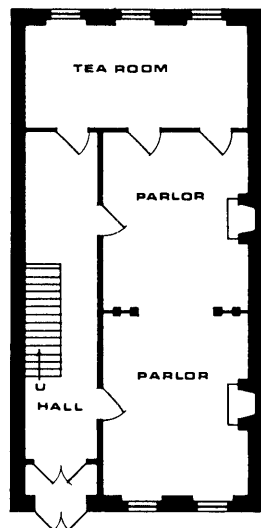


図6 グreek・リヴァイ  
ヴァル・スタイルの住戸  
1階平面

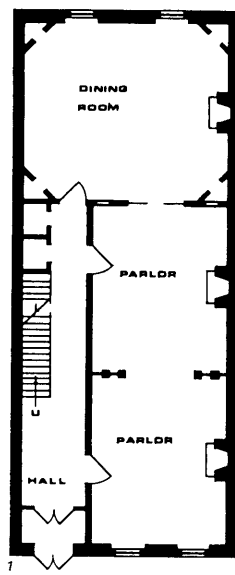


図7 イタリアネイト・  
スタイルの住戸  
1階平面

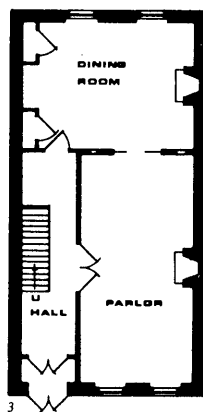


図8 イタリアネイト・  
スタイルの住戸  
1階平面

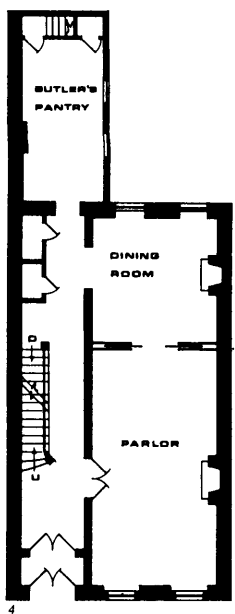


図9 イタリアネイト・  
スタイルの住戸  
1階平面

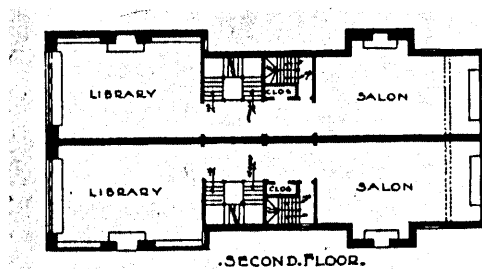
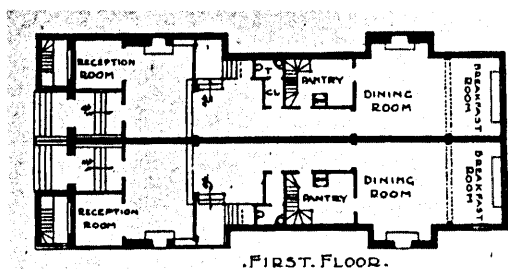


図10 ボザール・スタイルの住戸 1階, 2階平面

## 第2章 サンフランシスコのヴィクトリアン・ハウス

### 1) 研究対象の特質

サンフランシスコの街の魅力を形成している要因としてその起伏に富んだ地形と共に第一に思い浮かぶのは、ヴィクトリアンと総称される様式の住宅群が並び建つ姿である。一般に平地のローハウスが水平性を強調する連続形を示すのに対し、サンフランシスコにおいては激しい地形の起伏のためにローハウスでありながら一戸一戸の独立性が強い。このことはさらにヴィクトリアン・ハウスの縦長のプロポーションによって強調されている。またストूपと呼ばれる入口階段が特に高く、それらの連続する様もサンフランシスコの町並みを形づくっている。従ってサンフランシスコのヴィクトリアン・ハウス群は町並みを形成する様々な建築様式の特質を解明するための良き研究対象であるといえる。



図11 サンフランシスコの町並み

### 2) 歴史的背景

サンフランシスコは他のカリフォルニアの街と同様に18世紀中頃から19世紀にかけてスペイン人によって開かれた街であるが、ゴールド・ラッシュ以降これらの都市に対して、運送業、林業、鉱業、商業といった諸産業からの要求が課されるに至ったわけである。それに伴って交通の便、美しい眺め等の立地条件を満たすベイ・エリ

アからの郊外にスプロールしていくという発展経過をたどる。

その都市の形態で特に注目すべき点はその形成過程の特徴である。すなわちそれは広場を核とするスペイン式の都市構造の上に、アングロ・サクソン式のチェッカー・グリッド・パターンが強引に重合わされてできたものである。さらにそのグリッド・パターンが起伏の多い地形の上に投影され、独特の視覚的效果が生み出されて、現在のサンフランシスコの魅力を作り出したのである。

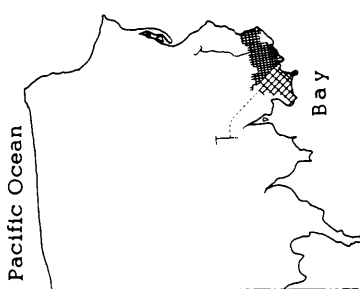
また19世紀中頃に都市部が飽和状態に達したことを契機に、都市周辺部から郊外にかけての開発に手がつけられた。1864年にはフレデリック・ロー・オルムステッド等によってステート・パーク・システムが確立されて、1865年のゴールデン・ゲート・パーク、バークレー、さらに1888年にスタンフォードといったように、海を見下ろす小高い丘の上や川の流れてに沿って公園やブルバードが作られるようになった。ハイツという名で呼ばれることの多いこれらの住宅地はヴィクトリアン・ハウスの集まる美しい町並みを持っている。

このような時代の流れの中で19世紀後半から歴史的な大地震(1906)を迎えるまでの20～30年間こそまさにヴィクトリアン様式の花開いた黄金時代とも言えるのである。

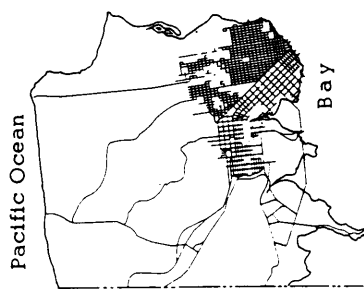
### 3) サンフランシスコ・ヴィクトリアンの特色

#### a) 様式の折衷性

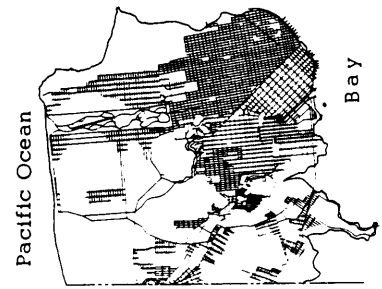
様式の折衷性という特色はヴィクトリアンにおいて一般に言えることであるが、それは特にサンフランシスコの住宅において際立っていると言える。ニュー・イングランド地方のニュー・ポートのヴィクトリアンに比べれば、そのことは明らかである。様式的には、スティックからイーストレイク、イーストレイクからクイーン・アンへ、そしてシングルやリチャードソニアン・ロマネスクへと移行してゆくスタイルの変化は、それらのスタイルの特徴を取り出して自由に組み換えるという一連の作業として捕えることができよう。このことは、西部の建築家の歴史的知識の欠如として片づけられることではな



San Francisco 1853



San Francisco 1870



San Francisco 1900

図12 サンフランシスコの都市発展経過

く、むしろカリフォルニアの自由な空気、進取の気性によるものと考えるべきであろう。それはアメリカにおける最初のコンクリート建築が建てられたのはサンフランシスコであったという事実によく示されている。

#### b) ウッド・ワーク

ヴィクトリアン・ハウスの主要な構成材、仕上げ材は「木」である。このことはアメリカ北西部の豊かな木材資源に恵まれていることと、都市建設が急がれたことの両方の理由によるものであろう。その外装はクラップ・ボードに代表される木材であり、その構造も木によるバルーン・フレームである。かなり大規模なイタリアネイトやセカンド・エンパイアー様式の住宅においても外装は木材によるクラップ・ボードであることが多い。また装飾的な部材も、木工細工(Wood Curving)職人によるものである。またこういった豊富で、時には過剰とも思えるような装飾にはフランボワイアンの装飾様式が用いられることが多く、それらはほとんど華やかな色彩のペイントがほどこされている。

#### 4) スタイル (建築様式)

一般に広い意味でヴィクトリアン様式というと、以下のようなスタイル (建築様式) を含む。

|               |           |
|---------------|-----------|
| □ゴシック・リバイバル   | 1840～1880 |
| □イタリアネイト      | 1840～1885 |
| □セカンド・エンパイアー  | 1855～1885 |
| □イーストレイク      | 1860～1890 |
| □オクタゴン        | 1850～1870 |
| □エキゾチック・リバイバル | 1835～1890 |
| □スティック        | 1860～1890 |
| □クィーン・アン      | 1880～1910 |
| □シングル         | 1880～1900 |

これらのうちでサンフランシスコを含めたアメリカ北西部で主に見られるものとしては、イタリアネイト、セカンド・エンパイアー、イーストレイク、スティック、クィーン・アン等である。それらの主な特徴と代表例を示す。

##### a) イタリアネイト

主に2～3層で、屋根勾配は緩やか。軒は大きくオーバー・ハングしており、装飾的なブラケットによって支えられている。窓は縦長のプロポーションでありU字型(フル・アーチもしくはセグメンタル)のクラウンを持つ。これもまたかなり装飾的なものである。全体形はヒップド・ルーフ、ゲブルド・ルーフ、フラットルーフ等の屋根形態によって特徴付けられるが、四角形のクーポラやタワーを持つこともあり、タワーを前面に押し出した構成をとる場合はイタリアン・ヴィラ・スタイルに近くなる。クレイ・ストリートにある Seven Row Houses がこのスタイルの例である。

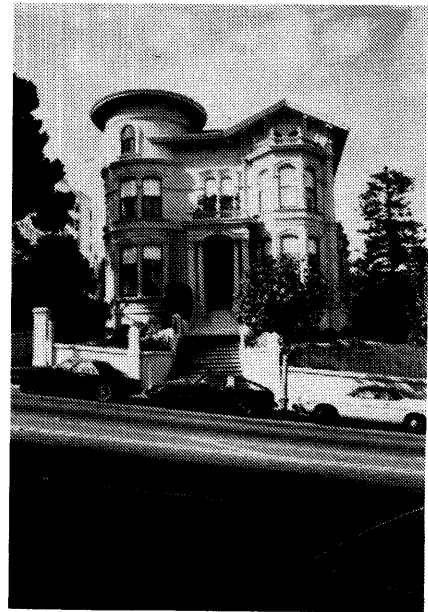


図13 Seven Row Houses  
2637-2673 Clay St.

##### b) セカンド・エンパイアー

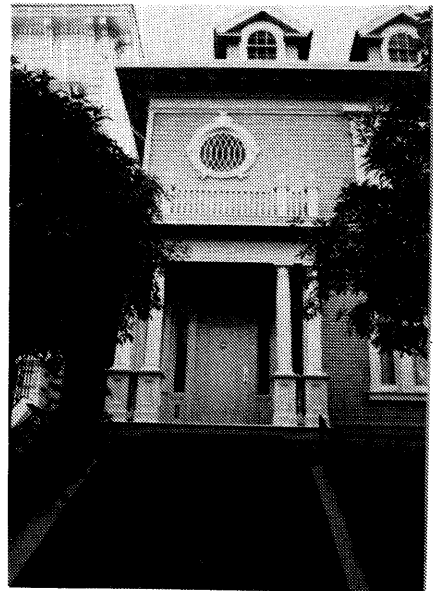


図14

Napoleon III (1852～1870) 期の French Second Empire の様式に由来することからこの名でよばれる。その大きな特色は屋根にあり、ほとんどがドーマー窓を持つマンサード・ルーフである。イタリアネイトと同様に、装飾的なブラケットが用いられ、シャトーレスクに共通するトレーサリーのパラペットが用いられることもあれば、クーポラが乗ることもある。高くクラシカルな細部を持つ煙突も重要なエレメントである。多層化されたオーダーがしばしば用いられるが、コロッサル・オーダーは使われない。

##### c) イーストレイク

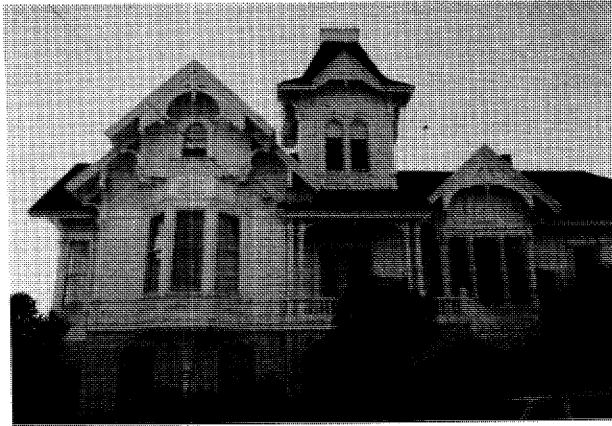


図15 Nightingale House  
Buchanan & Waller Sts.

広義の解釈では、スティックに属するスタイルである。Charles Lock Eastlake の名前に由来する様式で、彼の著書「A History of Gothic Revival」, 「Hints of Household Taste」によって流布した。全体形では、細身のゲーブルド・ルーフもしくはマンサード・ルーフによって特徴付けられる。エレメントとしては、曲線形のブラケット(妻部)、打ち抜き穴の装飾(circular perforation)、家具の足を思わせるポスト、バラストレード、Elizabethan Strapwork を偲ばせるイーストレイクパターンニング(インテリア及び家具)等の部分的装飾によってスティックやクィーン・アンと区別できる。

d) スティック



図16

V. Scully の命名によるスタイルで、1840年頃から始まり、Andrew Jackson Downing の「Pattern Book」によって流行した。板材と角材によって住宅を包み、表面を骨組的に表現するというこのスタイルは Swiss Châlet や Gothic に負うところも大きい。全体形は複雑なシルエットで、背の高いプロポーションを持つ。部分形の特徴は何よりもその骨格的表現を持つスティック・ワークに現れるが、張り出したポーチ、ダイアゴナルなポストなど(前期)から垂直な板と小角材(ボード・アンド・

バタン、後期)へと変化するとともに後期になるにつれて装飾が過剰になっていく。これらはイーストレイク装飾が用いられることも多く、スティック・イーストレイクとも呼ばれる。

e) クィーン・アン

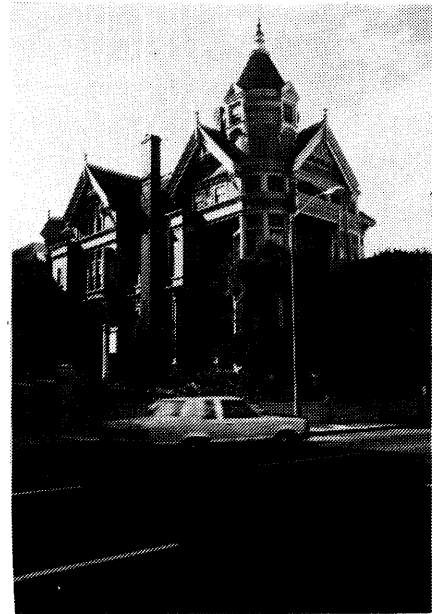


図17 Haas-Lilienthal House  
2007 Franklin St.

不定形のプラン、マッシング、多様な色彩、様々に変化する外壁パターン等に特徴付けられる非常に装飾的で折衷的な様式。アメリカでは1876年の Philadelphia Exposition 以降流行し、その後都市部では、スティックと同様にシングル・スタイルへと変化するが、郊外ではこのスタイルが残った。Richard Norman Show にちなんでショービアンとも呼ばれる。部分的には、ハーフ・ティンバーを持つゲーブル、石積み、もしくは煉瓦積みの下階に対して、様々なパターンを持つシングル、横板張りの上階、円形や多角形のタレット、Cut brickやMolded Brickによる装飾的な煙突を持ち、Free Classicと呼ばれるクラシカルでスケール・ダウンされたオーダー等を持つこともある。

#### 参考文献

1. A Guide to Architecture in San Francisco & Northern California  
D. Gebhard and others
2. American Architecture Since 1780  
Marcus Whiffen
3. Victorious Victorians  
Peg B. Sinclair
4. San Francisco Victorians  
Wesley D. Vail
5. A Field Guide to American Houses  
Virginia & Lee McAlester





周辺を飽和状態に至らしめ、住宅地は急速に郊外にスプロールしていった。こうした社会状況から生まれた「プレイス」の大半が公園に隣接するかたちで建設されているのは、商業、工業の排煙や騒音から逃れ、平和に静かに暮らしたいという当時の人々の欲求の顕れと考えられる（図19）。

セント・ルイス市の最初の「プレイス」は、1851年にできた「Lucas Place」であるが、その後の「プレイス」の発展に多大な影響を与えたのは、1867年、測量技師であった Julius Pitzuman による「Benton Place」（図20）である。彼は他にも数多くの「プレイス」を設計したが、この考え方を展開させる上では、ロンドンの「スクエア（Square）」に大いに啓発されたと言われる。すなわちこの「スクエア」と管理規制の考え方を結びつけることで、「プレイス」特有のプライバシーと静穏さを生み出そうとしたのである。この「Benton Place」での新たな試みは以下のことであった。1）私道の一端を閉じた（通過交通を禁じた）。2）私道中央に緑地帯を設けた。3）私道からセットバックさせて住戸を建てた。4）マンサード・ルーフを持つフレンチ・タウンハウスを建設した。すなわち、その後の「プレイス」の特質を決定づける基本的形態は、ここで生み出されたと言えよう。

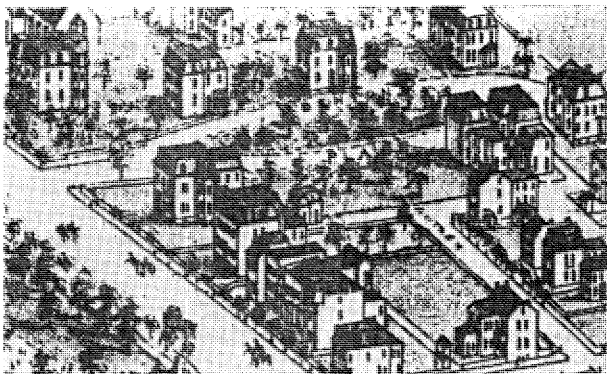


図20 ベントン・プレイス

この後「プレイス」は急速に発達し、1870年「Vandevender Place」、1879年「Shaw Place」、1888年「Westmoreland Place」、「Portland Place」、1890年「Kingsbury Place」、「Washington Terrace」、「Lewis Place」と続々と建設され、それぞれが個性のある形態をつくりあげた。たとえば「Shaw Place」は、幅100フィートにも及ぶ緑地と、各住戸が持つ疑似窓に特徴があり、また当時のエリートばかりが住んでいた「Vandevender Place」は、その壮大さと高級さを誇り、住戸は H. H. Richardson のような著名な建築家の設計によるものもあった。

1880年ごろには、門が「プレイス」のステイタス・シンボルとして捉えられ、デザインの重要度が増してくる。中世風の赤煉瓦でできた「Washington Terrace」の門（図21）や、ヴィクトリアン・クラシズムの「Kingsbury

Place」の門（図22）などは、初期の「Benton Place」などに比べるとより壮麗なものになっている。当時の人々にとって「プレイス」に住むということは、セント・ルイス市民としての誇りであるとともに、自分たちだけが「プレイス」を享受できるという、選ばれた人としての地位の表明でもあった。その建築的象徴として、私道の入口に建つ門により関心が注がれることになる。



図21

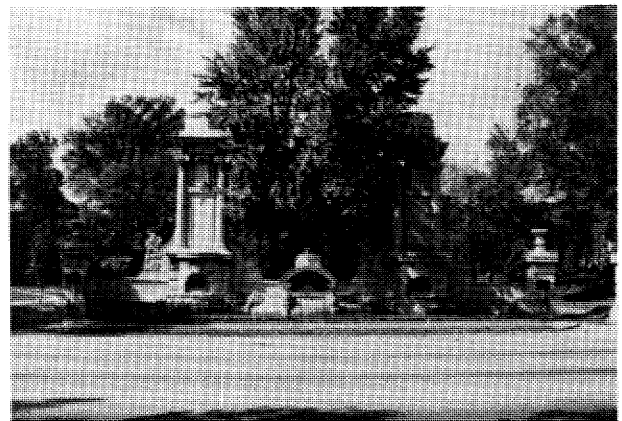


図22

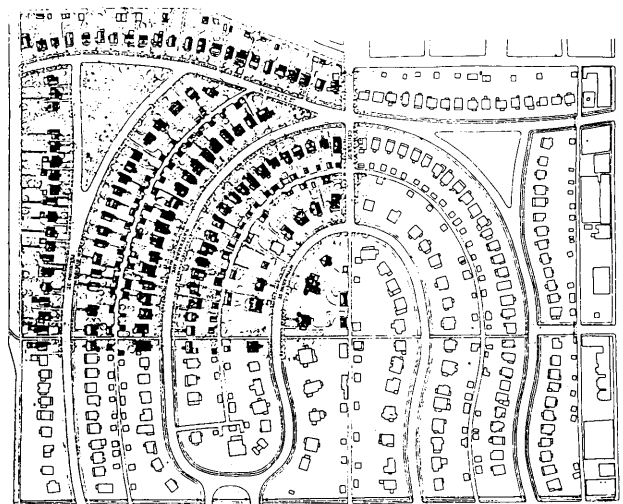


図23

1900年代に入ると、緑地帯はより手の込んだ植栽が施され、個々の住戸は規模も大きく、サービス用の小道はバックヤードとしての性格を帯びてくることになる。また全体形も1904年の「Parkview Place」(図23)や「Longfellow Place」のように曲線的で複雑なものも現れてくる。しかし、このころをピークに「プレイス」の開発は衰退し、1922年以降の都市部の変革のために取り壊されるものもいくつかあった。しかし今日でもなお、良き住宅地として町の中心部に色褪せることなく維持されている「プレイス」も少なくない。

#### 第4章 シカゴ郊外のコミュニティ リバーサイド (イリノイ州)

##### 1) 研究対象の特質

リバーサイドはシカゴ西方約9マイルに位置し、Des Plaine 川沿いに展開された約1,600エーカー(計画当時)の面積を持った郊外のコミュニティで、1869年にランドスケープアーキテクトのフレデリック・ロー・オルムステッド(Frederic Low Olmsted)と彼のパートナーのカルベール・ヴォー(Calvert Vaw)により計画された。アメリカで計画された郊外コミュニティの中で最も早いものの一つである。

鉄道により工業都市シカゴに連絡し、工業や大きな商業施設を持たない住宅のみのコミュニティを目指したもので、今日ベッドタウンと呼ばれるものの原形をここに見る事ができる。当時、既に郊外への無秩序なスプロール現象の兆候は見え始めていたが、この計画は、緑地帯やゲート、柵などのヴォキャブラリーにより注意深く隔離し保護されるならば、郊外コミュニティの良き統一が形成され、かつ、長期に渡ってそのアイデンティティーが維持され得る事を示している。

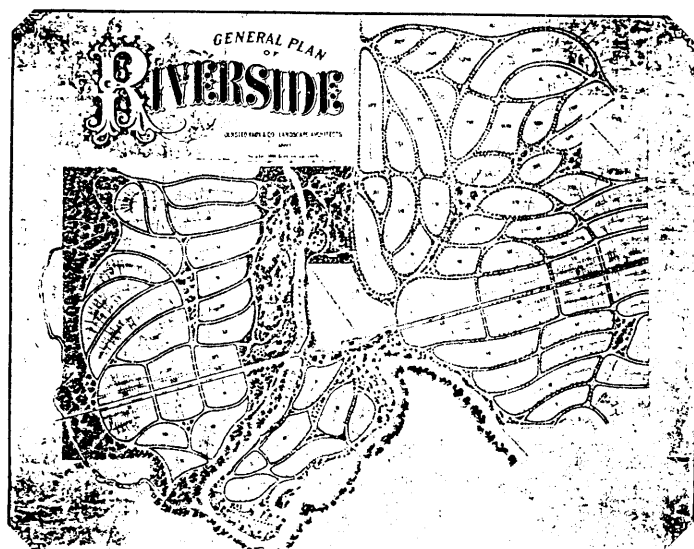


図24 オリジナルのマスタープラン (1868)

ここでは、ニューヨークのセントラルパークを既に計画してきたオルムステッドによる郊外コミュニティの理念を彼が最初に提案した基本計画書(Preliminary Report)<sup>81</sup>を中心に考察し、次にその理念を特に道路パターン、住戸のレイアウト、各建物の様式等の観点において実際に形成されたリバーサイドの町と比較考察している。この住居群の良き特質が今日まで保たれている理由は、それが特異なレイアウトパターンを持っていた事や全体に余裕のある土地利用計画であった事等のデザイン上の成功によるものである事は明白である。しかし、それだけではなく、根強いコミュニティ意識に支えられた景観維持の規制やコミュニティ意識を促進する為の各種行事等の工夫をこらした運営システムによる所も多いと思われる。計画されてから100年近く経た現在においても尚、原形を残しながらこうした郊外コミュニティが無理なく生き続ける事ができるのは、計画の段階から、こうした運営システムについての配慮が十分に示されていたからであると考えられる。

##### 2) オルムステッドの郊外コミュニティに関する理念 及び提案された理想像について

###### a) 都市と郊外の密実なる二元性

彼は基本計画書の中で郊外コミュニティの必要性について、熱意をもって述べる。都市に人口が集中し、富や利便性が集中した結果、都市内の生活は活気を帯び極めて魅力的なものとなってきたが、それと同時に、ある階層の人々にとっては、公園の近くや田舎的な雰囲気を感じさせる低密度な郊外の住居を確実に指向し始めており、それはパリやウィーン等の世界的な大都市においても一般的な傾向となっている。それは決してファッション的な傾向ではなく健康の問題等から派生する心理的、社会的な問題であり、郊外において綿密に計画さ

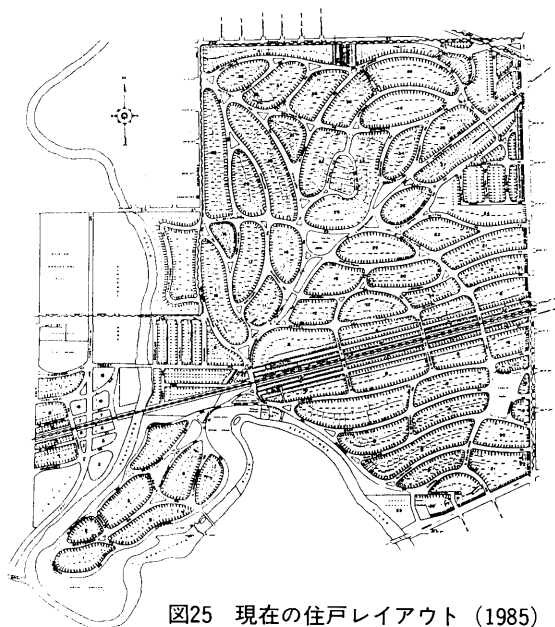


図25 現在の住戸レイアウト (1985)

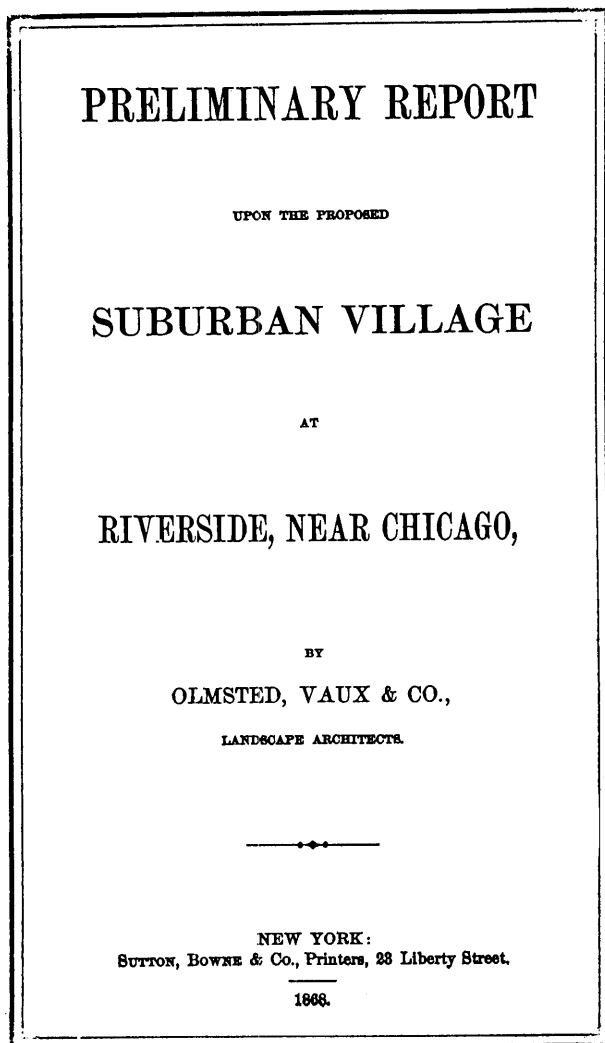


図26 基本計画書の表紙

されれば都市的な利便性は必ず得る事は可能であるし、大都市と郊外は常に表裏一体のものである (no great town can long exist without great suburbs)<sup>註2</sup>としている。そうした需要のもとで快適な住環境を確保したコミュニティを計画すれば事業化は可能であるとし、結果的にそれは成功したのである。

b) 鉄道のメリット及び道路（パークウェイ）の提案

リバーサイドの中心に鉄道駅を配置した地理的メリットを述べているが、現実的にはやはりシカゴと結ぶ自動車、馬、歩行者の為に幹線道路が必要であるとし、緑化されたアプローチのイメージについて述べている。又、内部の道路パターンについては、郊外のコミュニティの中に大都市的な直交グリッドのパターンを持ち込む事は無意味であるとし、今まで他に例を見ないコーナーを持たない曲線的な道路によるユニークなネットワークパターンを提案している。

c) 排水施設の整備

道路に側溝等を設ける必要性を述べ、先行投資の先行的メリットを明らかにする

d) プロムナード・共通広場の提案

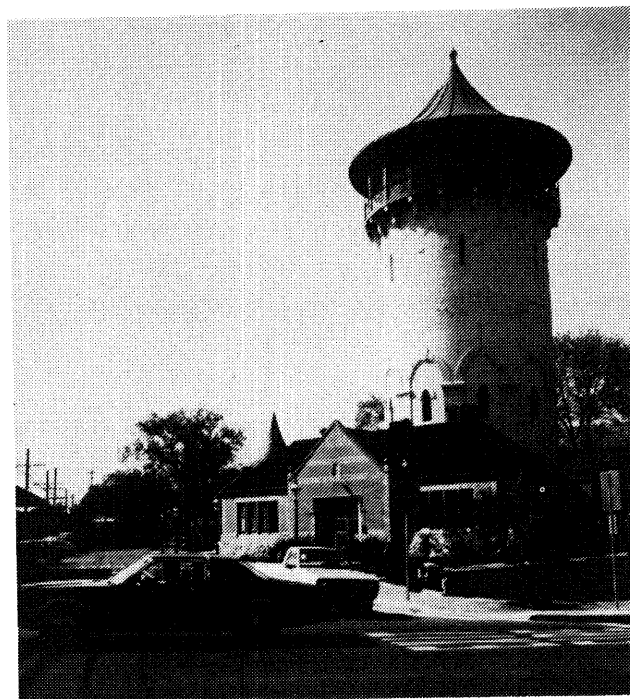


図27 給水塔(Water Tower) (1870)



図28 現状のタウンスケープ

シカゴのような大都市にヨーロッパに見られる様なプロムナード（散歩道）が無いのを批判し、特に郊外のレクリエーションやコミュニティ意識の育成の為に、誰もが歩けるプロムナードや共通広場(pleasure-ground)の存在が必須であるとしている。

e) 住戸のレイアウトとその条件

住戸は騒音、散歩道のスペース等を考慮し、内部道路より離して建設し、その間に私道を引き込む事として、数本の木をそのフロントヤードに植える事を義務づけた。現実には各戸のデザインをコントロールする事を不可能としながらも上記のような方法でピクチャレスクな街並みを形成すべきであるとしている。<sup>註3</sup>

f) レクリエーションゾーンの充実

郊外コミュニティの最大メリットは個々の敷地境界を超えた総合的な環境の価値であるとし、あくまで建物は、自然の中で従属的なものであるとしている（公園のイメージ）。また、川をせき止めて人造池を造り、ボート

遊び等をする理想郷のイメージを提案している。

### 3) 現況との比較考察

#### a) 全体のイメージ

Des Plaines 川の西側を南北に走る Gulf Road より東側の部分については、現況の道路パターンや土地利用状況は殆ど、当時のマスタープランのそれに従っており、原形のイメージが極めて良く保存されているのが明白である（図24、25）。

#### b) 道路パターン

ゆっくりとカーブしてゆく道路のパターンは方向性の感覚を失い易く、極めて自分の所存位置の確認が困難であるが、駅前プラザに残されているウィリアム・ル・バロン・ジェニー(William le Baron Jenny)による中世風の給水塔(water tower)が重要なランドマークの役目を果たしており、当時、そうした役割を予見して計画された事は想像に難くない（図27）。

#### c) 住戸のレイアウト

住戸は現況においてもやはり道路よりセットバックして建てられており、一つ一つのロットはかなり大きいものとそうでないものとにわけられる<sup>4</sup>。フロントヤードの樹木については現在でもきびしい規定が設けられており<sup>5</sup>、陰影に富んだタウンスケープを今でも残している。

#### 注

1 “Preliminary Report upon the proposed Suburban Village at Riverside near CHICAGO”  
Olmsted, Vaux & Co.

2 P. 7 前掲書

3 セットバックの距離は30フィート以上とし、最低、当時の金額で\$3,000以上の建設費をかけた住宅しか建てられない規定であった。

P. 13 “Riverside with a description of its improvements together with some Engravings of View and Buildings”  
the Riverside Improvement Company 1871

4 適正な敷地の規模は幅員100フィート、奥行200フィート程度とされた。

P. 9 前掲書

5 許可を得ないと草木の植樹や伐採ができない規定になっている。

“Civic & Business 1984 Directory of Riverside”  
Riverside Chamber of Commerce 1984

## 第5章 コロラドのマイニング・タウンズ

### — Colorado Mining Towns —

#### 1) 研究対象の特質

対メキシコ戦争（1846～48）の勝利による広大な中・西部地域（現在のコロラド、ニューメキシコから西海岸カリフォルニアに至る6州）の併合は、合衆国フロンティアの西漸運動に対する合法的な擁護であったが、それを民衆のレヴェルにおいて決定づけたのは勝戦の同年にカリフォルニアで発見された金による挑発である。この所謂ゴールドラッシュがカリフォルニアからロッキー山中へと拡散していった過程において、フロンティア・ライ

ン背後の未開発地域には無数の坑道が掘られ、『東部植民時代に、というよりはフロンティアにおいて広められた』といわれる合衆国民主主義を实践するプリミティブな共同体社会が生まれていったのである。その多くは貧しく粗野な集落の域を出ることなく消滅していったが、各エリアの中心にあたる幾つかの町には例外的に、周囲の居留地を統合し富をたくわえた都市的スケールの街並みが残されている。本章ではそれらロッキー山中の鉱山都市——コロラド・マイニング・タウンズ——を、1) その成長を19世紀後半のアメリカ合衆国の社会状況と平行に捉え位置づけること、2) 今回の調査をもとに現況の連続立面図を新たに書きおこし、個々の建物に言及しつつ全体としての街並みを分析すること、の2点を要点として論じる。すなわち、歴史的な時間の中で俯瞰すると同時に、それからは自由な、“かたち”として街を鑑賞すること。アメリカに特徴的な自然や建築／都市を規定する意識が、一気に建設され、たかだか数十年の存続とその後の荒廃の中に強く現れているのである。調査の対象としたのは、各々コロラド州の

|                  |           |         |
|------------------|-----------|---------|
| ブラックホール/セントラルシティ | 1859-     | (-93)   |
| ジョージタウン/シルヴァープラム | 1860, 64- | (-93)   |
| レッドヴィル           | 1877      |         |
| クリップル・クリーク/ヴィクター | 1891-     | (-1962) |

（年代は発端となる金、銀等の発見の年。括弧内は主たる鉱山を閉鎖した年。）

の5エリアであり、シルヴァープラム以外は現在も町と

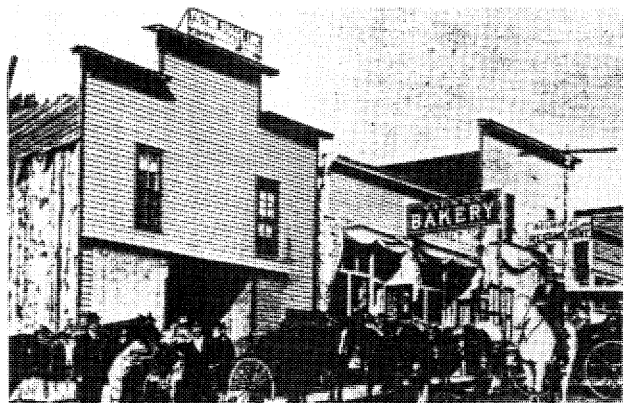


図29 ヴィクター 1893

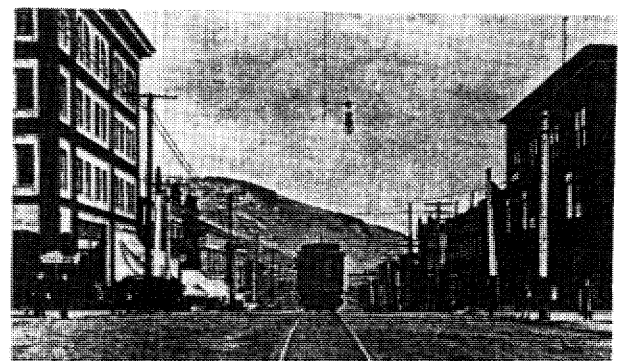


図30 ヴィクター・アヴェニューとストリート・カー

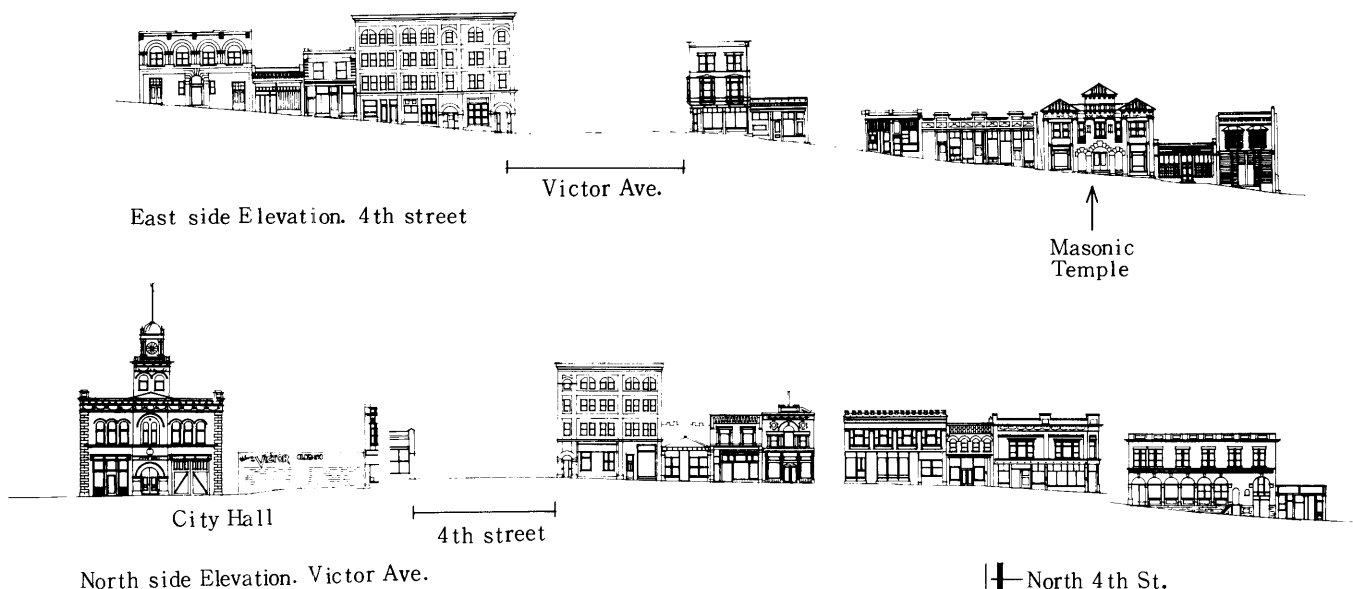


図31 連続立面図

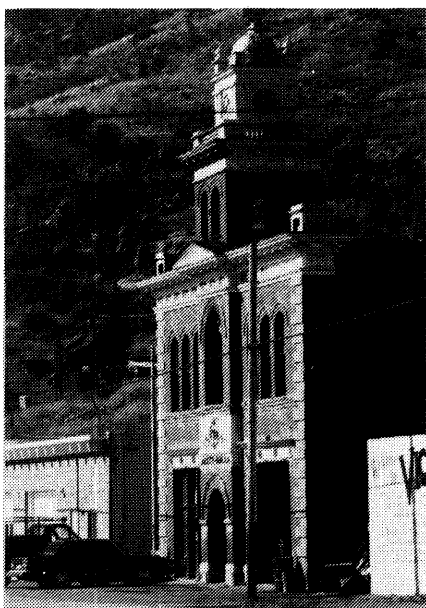
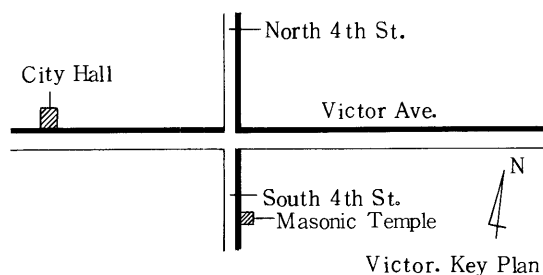


図32 シティ・ホール

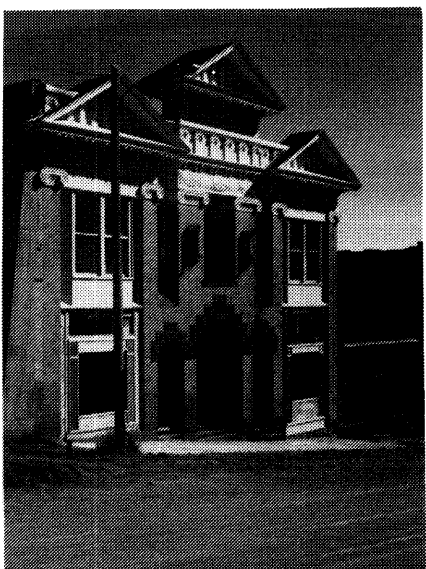


図33 メソニック・テンプル

して機能している。このうち本章では特にヴィクターについて詳細な考察を加えた。

## 2) 同時代のアメリカ合衆国と金鉱

1861-65年の南北戦争が示したように、建国以来わずかの間で大陸国家に膨れあがったアメリカ合衆国は、当時の段階では、意識としてその全土を領有し共有するまでには至っていない。地域間で対立する利害は、南軍の敗北というかたちで調停され、ようやく国家としての性格が明示されるのである。以後の合衆国は、西部地域への農民の定着（ホームステッド法 1862）や大陸横断鉄道の建設（開通1869）など、農業の発展と残されたフロンティアの有効利用を図る一方、第二次産業革命（蒸気タービン→ガソリン/ディーゼル・エンジン、電信・電話の発明等）と歩調を合わせた急速な工業化が進み、東北部の主奪する資本主義国家としての基盤が確立することになる。これらと平行する熱狂的なゴールドラッシュとコロラドの鉱山都市の成長は、1893年公布のシャーマン法(Sherman Silver Purchase Act)による銀価格の暴落と両大戦、世界恐慌による混乱を区切りとして、歴史的に大きく二分できる。すなわち、60's~90'sの銀採掘を主体とした時期（中心地レッドヴィル）と、90's~1930'sの金採掘を主体とした時期（中心地クリップル・クリーク/ヴィクター）と、である。これらの中心都市はそれぞれの時期にあって、内地の未開発地域への拡散とそれらの統合、豊かな鉱物資源の提供、という両面において

国家と同時代的であり続け、合衆国資本主義の成立と展開に多大な影響を与えたのであった。コロラド州の成立はまさにその最中、1876年である。

### 3) ヴィクター、金の街

現在クリップル・クリーク・ヴィクター・マイニング・ディストリクト(Cripple Creek-Victor Mining District)と呼ばれている数キロメートル四方の高地は、1900年には\$ 18,000,000もの金を産出し、カリフォルニアとアラスカの合計を越えるともいわれた世界でも有数の地域である。以下に取り上げるヴィクター(Victor)はクリップル・クリーク(Cripple Creek)と共にこの富の集積を代表する街であり、盛期には十数個あった同地域の街がすべてゴースト・タウンとなっているなかで現在まで存続するただ2つの街である。

1893年11月の入植以来のマツ材を用いた粗末なクラブ・ボードのヴィクターは1899年8月の大火によって焼失したが、当時の写真(図29)や他の街の状況から判断されるオリジナルな街並みと、再建後今に残るヴィクター・アヴェニュー(図30, 31)との間には基本的な共通点が指適できる。すなわち、

- 1階にショップ、サロン等のパブリックな機能を与え造形的にも大きな開口とガラスを用いたオープンな表現になっている。
- 2階、あるいは3階におけるアーチ窓、ベイ・ウィンドウ室、縦長のプロポーションのリズミカルな連続。
- 平面的な壁の表現。
- 各層を明快に分離する水平基準線としてのモールディング。特にパラペット部分では凹凸の造形が、建物と同時にスカイラインに対して極小のリズムを刻む。
- 絶対的なヒューマン・スケール、あるいは小さめのスケール・アウト。
- 連続するリズムの中に浮き上がる、省略され幾何学的に再解釈された古典言語。

単体の建物はそれぞれに大小や程度の差があり、四周の立面を意識して建てられたものは希ではあるが、ストリートに面しては、看板状のファサード(false-front)にこれらの要素が集中し、統一的／流動的な都市空間を創りあげている。そしてベースとしてこれらを共有しながら、幾つかのモニュメンタルな建物がスカイラインから突出し、“ディテール”として強調される。特に、フェデラル・スタイルを基調としつつも上階に連なるアーチが卓抜なシティ・ホール(City Hall)(図32)や、メソニック・テンプル(Masonic Temple)(図33)の捕らわれることのないフリー・スタイル・クラシシズムは特筆されよう。

この街並みにあって建築は、施主のために、ではなく街のために、建てられる。金、ではなく、人々によって建てられる。かつてトマス・ジェファーソンがアメリカ

民主主義を体現する新しい建築様式を創造したのと同じく、コロラドの粗末な居留地に山師達が残してくれたのは、一瞬の繁栄の間に築いた理想都市なのである。

### 〈研究組織〉

|    |       |               |
|----|-------|---------------|
| 主査 | 香山 壽夫 | 東京大学工学部教授     |
| 委員 | 小林 克弘 | 東京都立大学講師      |
|    | 小林 正美 | 東京大学大学院博士課程1年 |
|    | 藤野 雅統 | 建築家フェイズ計画研究所  |
|    | 奥山 隆平 | 日建設計          |
|    | 小比賀一史 | 東京大学大学院修士課程2年 |
|    | 千葉 学  | 東京大学大学院修士課程2年 |